



ありあけ

●発行日 2008年12月1日
●編集 会報編集委員会

●発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ http://dousou.saga-u.ac.jp/

アフリカ生まれの 佐賀育ち、

「バラフ」



①バラフの花：通称アイスプラント。バラフは佐賀大学の商標。自然条件下では長日条件（6～7月）で開花する。



②バラフ栽培状況：水耕栽培のベット風景。最適な栽培条件では、4ヶ月程の収穫期間が続く。収穫対象は、若芽の部位。



③バラフの販売：2008年佐賀バーベキューフェスタ会場うまかもん市場での販売風景。佐賀市内ではアルタ、季楽、玉屋・ふる里館などで販売中。

目

アフリカ生まれの佐賀育ち「バラフ」.....	P 1
農学部同窓会の動き.....	P 2～3
・第23回佐賀大学農学部同窓会の紹介（H19年度実績、20年度計画報告、新役員等）	
農学部の動き.....	P 4
・佐賀大学公開シンポジウム - 循環型社会へ向けた 食料生産・加工・消費システムの研究・開発 -	
研究室紹介.....	P 5
（応用生物科学科 熱帯作物改良学研究室）	

次

会員の広場.....	P 6～8
・佐大への提言（I ♪ S 60年・生物化学 平山 伸氏）	
会員の情報（博士号取得）.....	P 8
・島田達生氏・小金丸和義氏	
支部だより.....	P 9～10
・大分県支部・福岡県庁農政部佐和会	
・佐賀県庁支部・佐賀県農協連支部	
・燦々会（昭和33年入学生の会）・73A農園会	
編集後記.....	P 10

平成19年度事業報告及び収支決算

事業報告

平成19年度は役員会を6回開催し、次の事業を執行すると共に、臨時総会を開催し会則の一部改正を行うなど、より円滑な同窓会活動に努めました。

- (1) 会員や大学先生方など多くの皆様の投稿を頂き同窓会報を創刊(5,100部)
- (2) 大学主催のキャリアデザイン講座や就職ガイダンスの講師として会員を派遣。
- (3) 個人情報保護の観点から名簿発行を中止し、同窓会で会員名簿を管理。
- (4) 農学部・全学同窓会支部への支援活動。



収支決算

(1) 一般会計

〔収入〕(H19.7.1~H20.3.31)

科目	19年度実績	摘要
前年度繰越金	590,022	
会費	3,988,000	
学 生 (新入生)	110,000	入会金(H19)5名×2千円=10,000円 会費(H19)5名×2万円=100,000円
一般会員	3,878,000	年会費 延1,144名×2千円=2,288,000円 終身会費 53名×3万円=1,590,000円
記念誌販売	12,000	農学部創立50周年記念誌800円×15部
雑収入	1,211	預金利息
計	4,591,233	

〔差引残〕

(収入)4,591,233円 - (支出)3,144,899円 =
1,446,334円(次年度へ繰越)

(2) 特別会計(H19.7.1~H20.3.31)

科目	19年度実績	摘要
前年度繰越金	8,913,685	
一般分 a	8,913,685	
会費平準化準備金 b	0	
入会金 c	2,500	新入生入会金 (H19.5名)×500円=2,500円
会費平準化準備金 d	1,590,000	一般会計より繰り入れ(終身会費相当額)
雑収入 e	7,181	預金利息(普通)
計	10,513,366	

支出はなく全額次年度へ繰越

会計監査報告

平成19年度分の会計監査を実施したところ、会計諸帳簿及び証拠書類、預金通帳等いずれも適切に処理されていたことを認めます。

平成20年6月21日
 監事 澤野 兵五
 監事 石川富美夫

〔支出〕(H19.7.1~H20.3.31)

科目	19年度実績 (B)	摘要
事務費	313,536	総会案内、各支部総会等出席
会議費	166,826	総会資料代、役員会経費
事業費	888,210	*同窓会会報創刊号発行・送料など(5,100部) 366,347円 *名簿情報管理(後納郵便料、人件費、印刷代など) 257,880円 *キャリアデザイン講師旅費(1名) 76,674円 *就職ガイダンス講師旅費・講演料 10,578円 *同窓会旗5枚・横断幕1枚 149,835円 *会費振込み手数料 26,896円
組織強化費	117,827	各支部総会等出席時の御祝 支部設立に懸かる通信費 70,000円 47,827円
全学同窓会負担金	66,000	新入生入会金・会費の60% 5名(H19年)×(2千円+20千円)×60%=66,000円
特別会計への繰出金	1,592,500	
新入生入会金	2,500	新入生入会金 5名×500円=2,500円
会費平準化準備金	1,590,000	終身会費(53名分)
予備費	0	
計	3,144,899	



平成20年度事業計画及び収支予算

事業計画

平成20年度は会員が同窓会をより身近なものとするために、支部体制の充実や、会報を全会員に配布するなど各種情報の提供に努めるとともに、大学と同窓会との意見交換会の開催など、大学と連携した取り組みを行います。

- (1) 大学と同窓会との意見交換会の開催
- (2) 会報「ありあけ」の発行・配布（6月、12月）
- (3) 同窓会会員名簿の管理。
- (4) 同窓会支部活動に対する助成。
- (5) 農学部同窓会長賞の授与
- (6) キャリアデザイン講座等への会員派遣

収支予算

(1) 一般会計〔収入〕(H20.4.1～H21.3.31)

科目	20年度予算	摘要
前年度繰越金	1,446,334	
会費	4,046,000	
学生(新入生)	3,608,000	入会金 (H17;1名+H20;163名)×2千円= 328,000円 会費 (H17;1名+H20;163名)×2万円=3,280,000円
一般会員	438,000	年会費 延39名・年×2千円=78,000円 終身会費 12名×3万円=360,000円
記念誌販売	0	
雑収入	666	預金利息
計	5,493,000	

〔支出〕(H20.4.1～H21.3.31)

科目	20年度予算	摘要
事務費	730,000	総会案内、各支部総会出席旅費
会議費	300,000	
総会費	170,000	懇親会、資料など
役員会費	130,000	食事代、会場使用料
事業費	810,000	* 会報印刷代 100千円(5千部)×2回、送料250千円 450,000円 * キャリア講師旅費(1名) 80,000円 * 会費納入促進(プリンター・トナーなど) 70,000円 * 就職ガイダンス講師旅費・講師料など 50,000円 * 同窓会長賞表彰 50,000円 * 同窓会旗(2.5万円×2) 50,000円 * 大学との意見交換会経費 60,000円
組織強化費	150,000	各支部総会等出席時の御祝 70,000円 支部助成金 80,000円
全学同窓会負担金	2,164,800	新入生入会金・会費の60% 164名×(2千円+20千円)×60%=2,164,800円
特別会計への繰出金	442,000	
学生入会金	82,000	新入生入会金164名×500円=82,000円
会費平準化準備金	360,000	会費平準化準備金(終身会費12名分)
予備費	896,200	
計	5,493,000	



(2) 特別会計 (H20.4.1～H21.3.31)

科目	20年度予算	摘要
前年度繰越金	10,513,366	
一般分 a	8,923,366	
会費平準化準備金 b	1,590,000	
入会金 c	82,000	新入生入会金 (H20; 164名)
会費平準化準備金 d	360,000	終身会費 (12名)
雑収入 e	4,315	預金利息
計	10,959,681	
一般分 (a+c+e)	9,009,681	
会費平準化準備金 (b+d)	1,950,000	

支出はなく全額次年度へ繰越

農学部同窓会役員 (H20・21年度)

役職	担当	氏名	卒年・学科(専攻)	勤務先
会長		松尾 正紀	43・農学(育種)	
副会長		山口 郁雄	52・農学(農経)	高志館高校
副会長		光富 勝	51・農学(食品)	佐大農学部(生命機能)
理事長		溝口 善紀	53・農学(病理)	佐賀中部農林事務所
理事(15名)	編集委員	白武 義治	51・農学(農経)	佐大農学部(生物環境)
	編集委員	有馬 進	52・農学(農経)	佐大農学部(生物環境)
	編集委員	吉賀 豊司	H2・園芸(応動)	佐大農学部(応用生物)
	編集委員	田中 宗浩	H4・生食(施設)	佐大農学部(生物環境)
	会計	郡山 益実	H7・生食(浅海)	佐大農学部(生物環境)
	編集委員	信原 浩二	H2・園芸(蔬菜)	県農業試験研究センター
	支部連絡員	松浦源三郎	H3・農学(土壌)	佐賀中部農林事務所
	支部連絡員	西池 大生	H5・生食(干拓)	県農地整備課
	支部連絡員	福地 浩二	H1・農学(農経)	J A 佐賀中央会
	支部連絡員	外戸口良文	61・農学(干拓)	佐賀農業高校
	支部連絡員	福田 喜隆	63・農学(土改)	佐賀市議会事務局
	編集委員長	北川 行俊	37・農学(園芸)	(前会長)
	編集委員	林 暉宏	45・農学(園芸)	佐賀県農業信用基金協会
	会計	宝蔵寺 博	45・農学(土改)	佐賀県土地改良事業団体連合会
	編集委員	古川 辰馬	40・農学(育種)	
監事(2名)		江頭 俊雄	49・農学(作物)	J A さが
		森田 昭	52・農学(農経)	県農業大学校
佐賀県庁支部長		福島 末行	50・園芸(果樹)	県農業技術防除センター
佐賀県教職員支部長		水田 和彦	51・農学(農機)	佐賀農業高校
佐賀県農協連支部長		納富 敏明	56・農学(食管)	J A さが
熊本県支部長		山本 秋夫	48・農学(干拓)	熊本県上益城振興局
農業自営者の会長		角田 良正	50・農学(農経)	自営
佐賀県支部長		江原 忠彰	32・農学(園芸)	(元会長)

農学部の動き



佐賀大学公開シンポジウム - 循環型社会へ向けた 食料生産・加工・消費システムの研究・開発 -

農学部主催の公開シンポジウム「循環型社会へ向けた食料生産・加工・消費システムの研究・開発」が6月21日(土)に、佐賀大学農学部大講義室で開催されました。

農学部では、学長経費(中期計画実行経費)事業として、上記テーマに関する総合的な研究・開発が平成16年度から5カ年計画で行われていますが、平成19年度は過去3年間の研究・開発で得られた研究シーズをもとに、提案公募型研究として実施されました。今回は「食料資源開発のための小動物と微生物の生態制御に関する研究」、「環境汚染物質集積土壌の安定化処理技術の開発」、「食品成分の生理機能



探求と有効利用」、および「中山間・平坦純農村地域における地域資源の循環的利活用型

システムに関する実証的研究」の4研究課題が採択され、プロジェクト研究が行われました。



当日は、卒業生、教職員、高校生など約120名が参加しました。研究成果を発表していただいた先生方には、高校生にも理解できるように解りやすく説明していただき、聴衆は熱心に聴き入っていました。来年度の公開シンポジウムにも、多くの卒業生の皆様に参加していただきますようお願い申し上げます。

光富 勝(農化・51年卒)



演題と講演者は次の通りです。(発表順、敬称略)

1. 黄河流域観測圃場における土壌水分および塩分移動
- 中国黄土高原における農業の問題点 - 長 裕幸
2. 地域農業と食品製造業によるソーシャル・マーケティング 白武義治
3. 西日本におけるカブモザイクウイルス集団の遺伝構造
- 農作物にもエイズやインフルエンザみたいな病原体があるよ - 大島一里
4. 佐賀特産食品でメタボリックシンドロームを予防する 柳田晃良

シリーズ②

研究室紹介

応用生物科学科 熱帯作物改良学研究室

本研究室は、旧熱帯作物学研究室を引継いだ研究室である。今までの担当教員は、山川豊先生（元学長）、佐本四郎先生、和佐野喜久生先生で、現在は東江栄准教授と私・野瀬が担当している。また、大島健三さんも技術職員として多大な協力を頂いている。

研究課題は、山川先生時代においてはイネ品種「レイホウ」が育成され、和佐野先生時代には、イネ紋枯病抵抗性・感受性系統の育成および我国稲作起源の育種・栽培学的研究がなされてきた。現在は、光合成と炭素代謝をキーワードにして、生態学・生理学・生化学・分子生物学的な手法を用いて、①パインアップルおよび



インドネシア・北スラウェシ：Aha～熱帯

アイスプラントのCAM型光合成制御機構の解明、②アイスプラントのNaCl吸収・蓄積メカニズムの解明=>アイスプラントの佐賀県特産野菜化および塩類集積土壌技術の開発、③イネ紋枯病抵抗性・感受性の分子メカニズムの解明=>サステイナブル・クロップモデルの開発、④サトウキビの低温抵抗性機構の解明=>低温



バラフ販売パック



スマトラ島マングローブ調査休憩

耐性サトウキビの開発、⑤マングローブ林の炭酸ガス固定能力の評価=>Clean Development Mechanism (CDM)を利用したマングローブ林再生、を中心に実施している。

育てる人材は、研究者、農業法人リーダー、海外で働く農業専門家の3分類を目標にしている。過去5年間の就職状況として、研究者には公務員選択を含め17名、海外志向組みとしてはJICA 専門家・海外コンサル各1名、海外青年協力隊2名である。農業法人リーダとして学生ベンチャー「農研堂」に2名、本グループには会社関係就職も含めた形としているために上記以外の卒業生が含まれ、その主な職場は、農協系6名、種苗会社3名、農産物製造関係4名、食品販売関係7名等々となっている。

何よりの課題は、看板に掲げた名前に沿った実態が実現されているか？だと努力を重ねているが、その評価は卒業生の皆さんによるものだと思っている。

野瀬 昭博（農学部長）



熱帯作物改良学研究室メンバー

会員の広場

佐大への提言（Ⅰ）

横浜市 平山 伸

（S60年卒・生物化学）

数年前まで佐大には共同研究や各種講演会で度々訪問してきたが、同時に他の国内外の大学へも行く機会を得て、その際、佐大ではどうだろうか？という考えがいつも頭の中を巡っていた。その経験から外から見た佐大について感じたことを数回に分けいくつか紹介し、佐大の今後に向けた議論の場としたい。

1 美術・博物館機能を備えた PR 館の設置

外から佐大を見ていると、どのような研究がなされ、どのような成果が生まれ、どのような特徴ある設備があるか等が分かりにくい。これは、多くの大学に共通した課題でもある。特に、農学部では、これまで開発してきた新品種や栽培技術を紹介するには、新規な機械的装置の紹介とは異なり、難しさもある。

そこで、美術・博物館と広報機能を備えた PR 館の設置を提案したい。オープンキャンパス参加者や各種見学者は、まず、その PR 館を見学した後、キャンパスを実際に見てもらおうことが想定される。場所は本庄キャンパス中心のお堀を埋め立て設置することはどうだろうか。特に佐大には日本を代表する美術・工芸部門の作品群があり、これらと、農学部で開発した新規農作物、栽培方法、理工学部で開発してきた各種発電装置、化合物、医学部が開発した介助器具や手術法、旧制佐高の展示物、それらに加え、内閣総理大臣賞等の各種受賞実績、輩出したオリンピック選手・社長・大学教授・作家・芸術家・漫画家等を一堂に展示してはと考える。また、医学部での成果を多く紹介することで、医学部との共同研究の芽が生まれることを期待したい。この PR 館には地元の伊万里・有田焼や唐津焼のデザインを玄関や柱に備え、地域密着型大学のシンボルとすることが佐大にとっても重要と考えられる。また、これら内容展示や外装には遊び心のある趣が重要なことから同窓会の支援も必要になる。この PR 館に近い事例は早稲田大学、神奈川工科大学等にあり、美術館の事例は東京芸術大学にある。また、目指す PR 館は近隣の広島大学や鹿児島大学にある博物館のみの機能とは異なるため規模はそれらの5 - 10倍規模にすることが必要であろうし、その余裕あるスペースを利用した貸し画廊や学生の研究成果を披露する場と

することも考えられる。上記観点から設置すれば佐大 PR 館は多種多様な内容から、市民や受験生に人気のある、文字通り PR 館になるものと確信する。

2 水辺を設置した佐賀の杜モデル空間の形成

九州の国立大学は、大学キャンパスの緑陰形成に関しどこも脆弱であり、魅力が少ないのが現実である。その中で緑陰が比較的豊富でトップを行く佐大の魅力を一層高めるため、経済学部前に寄付・設置されたケヤキ広場のような複数列の植樹を一層増大させることを提案したい。特に、本庄キャンパスには蓮池や小川等の水空間があり、これらと緑陰をコラボレーションすると、他の大学に無い、魅力的な空間が形成される。樹高が高いケヤキなどを約8 - 10m間隔で3本×3本を1セットにして、植樹をすると、人が自然に集まる空間が形成される。更に条件を付けると、樹高は経済学部前のケヤキよりも樹高を高くする必要があり、また、樹種としてはカブ



東京農工大学

トムシが集まりドングリが実るクヌギも子供が集まる視点から興味深い。この事例は一橋大学、東京学芸大学、東京農工大学等である。これらの大学では形成された緑陰の中で近所の子供たちと学生が一緒に遊んだりする場面を見かけるし、四季折々に、写真撮影など多数の市民が集う空間となっている。九州から首都圏を見ると、一見ビルだらけのように想像されやすいが、上記首都圏の国立大学は九州の国立大学より遥かに魅力的な緑陰空間となっていることは、訪れる市民の多さからも容易に判断がつく（添付写真にて樹高が高いこと、樹木間に広い間隔があることを参考にされたい）。

この緑陰形成による上記、佐賀の杜モデル空間の形成は、緑陰が少なく樹高が低い樹木が目立つ佐賀平野のモデルでもあり、集客、観光散策での休憩スポットの観点からも一石を投じるものである。目指すイメージは子供達が鬼ごっこをしたり、昆虫採取



佐賀大学農学部前景

や生物・環境学習の場ができる木漏れ日さす空間である。また、佐賀平野の土壌はきめが細かいせい、アメリカフウやラクウショウ等、限られた樹種しか大きくなり難い印象を持つ。例えば農学部前のケヤキや教養・大講義室前のR・ポーリング博士来校記念のイチヨウは成長が著しく遅い。また、佐賀県庁前の桜も樹高が低い。従って、佐大キャンパスで樹高が高い緑陰形成を構築するには技術開発や手入れも必要と考えられ、これらの技術やノウハウは佐賀平野全体に適用できる。いずれにせよ、現実には都市工学科や農学部、文化教育学部理科専修等の知恵が必要であろう。

3 連合大学院の設置形態の検討

5 - 6年前、国際会議のポスターセッションにて静岡大学と岐阜大学との連名発表が目にとまり、更に詳しい問い合わせ先を訪ねたところ、第一声に明確な回答がなく、更に質問を加えたところ、静岡大学に籍を置く岐阜大学連合大学院の大学院生であった場面に出くわしたことがある。この時、感じたことは佐大でも同じことがあるのではとの危惧を抱いたものである。即ち、連合大学院の存在や構成大学と基幹大学の関係等が第三者に分りにくいことである。

一方、所属する大学院生にとっては、構成する他大学教官の講義を受けられ、他大学の大学院生との交流もでき、新たな知識の習得や人脈形成等の利点も多いのではとも考えられる。なお、博士課程の設置形態としては、①現状のままの連合大学院の形態、②連合大学院で学位を佐大にする形態、③佐大の他の学部との共同設置形態、④佐大農学部だけの単独設置形態等、が想定され、宮崎大学は③、静岡大学は①と②の両者、九州大学は④の設置形態である。

他に視点を変えると、時代が変り国立大学が独立法人化され、文部科学省のホームページでは大学院博士課程を対象にした数々の大型プロジェクト応募

が毎年行われる中、佐大農学部は文科省の大型プロジェクト応募に対応できるのか懸念される。

私自身は佐大に連合大学院が無かった時期の卒業生で論文博士のため、博士課程の経験が無く、博士課程の実態には疎い部分が多分にある。近年、佐大は「学生中心の大学」を標榜しており、上記時代変化の背景を考慮すると、CS (customer satisfaction : 顧客満足度) の観点から佐大の修士課程の学生や、これまでの連合大学院修了者、同窓会等に対し博士課程設置形態についてアンケート調査を行い、今後の博士課程設置形態への意見を集約する時期にきているのではないかと考えられる。

卒業生として、少なくとも時代の変化に即し、佐大にとってメリットが多い大学院博士課程の設置形態について議論がなされ、これまで各学会等で多数の受賞・実績を築いてきた伝統ある佐大農学部が、名実共に益々発展していくことを願うばかりである。

4 農学部玄関の装飾

近年の佐大を見ていると、新しいビルが建ち、耐震補強で近代的なイメージに建て替えがなされ、一見美しい印象になっている。しかし、地域密着性や伝統的な感性から目をやると、どの建物も現代的なデザインで建物の角々のエッジが強調され、やや殺風景な印象を与える(知り合いの他大学の先生も同じ意見であった。)

そこで、考えたのが、農学部玄関に伝統的な趣のある柱の設置や、入り口部分のアーチ状への変更、伊万里・有田焼のデザインによる装飾等、お洒落感を付与させることである。玄関は客人をもてなす入門機能と同時に、卒業時の記念写真撮影等、大学や個人にとっても重要な役割を果たす場所である。その場所をより魅力的な空間に変えることを提案したい。カササギや菱の葉のデザインを付与するのも面白い。一見無駄とも考えられるが、伝統や地域密着



早稲田大学

性を表現することで農学部に対する愛着が益々増大するものと考えられる。更に、玄関付近に枝垂れ桜を植樹して季節感を演出するのも興味深い。これらの実現には同窓会の支援や都市工学科や文化教育学部のデザインの助言も想定される。上記意見に賛同される方が現れることを期待したい。

5 時計台の設置

佐大が全国ネットや地元テレビ局で紹介される場合、ラクウショウ並木から映像が始まることが多く、ラクウショウ並木が佐大のシンボルとなっていることが容易に伺える。更に、本庄キャンパスでは、数年前に設置された地域学歴史文化研究センター（菊楠シュライバー館）は特徴ある三角屋根を有し、デザイン的にも80年以上前のそれとは想像がつかない趣で、お洒落な空間形成を演出している。

一方、他大学に目を向けると、東京大学、京都大学、一橋大学、東京工業大学、長崎大学、東京学芸

大学、東京農工大学、立命館アジア太平洋大学、西九州大学等には時計台が設置されてシンボルとなっており、待ち合わせ場所としても活用されている（添付写真を参考にされたい。）ここで注目したいのは、比較的新しい私立大学でも時計台を設置していることであり、時計台はその大学のシンボル化に重要な要素で、かつ即効性のあることを意味するものである。

恐らく、多くの在學生や卒業生が心のどこかに、佐大に時計台を設置したいとの強い思いがあるのではと推測される。本庄キャンパスに似合う時計台の設置場所を想像すると、図書館、理工学部1号館中棟、大学会館等が想定される。また、本稿1項で紹介させていただいたPR館も候補かもしれない。更に安価な設置形態として、理工学部1号館中棟にあるような受水槽の囲い部分を改造することも想定される。時計台設置は同窓生からの賛同も得られやすい条件と考えられ、同窓会としても支援ができないか検討しては如何だろうか。

会 員 の 情 報

会員の中で、これまで博士号を取得された方を紹介します。



島田 達生さん
(S42年卒・植物保護学)

- ①「Scanning Electron Microscopic Study on the Saccus Vasculosus of the Rainbow Trout：ニジマス血管囊の走査電子顕微鏡研究」
- ②博士（医学）
- ③久留米大学（昭和52年）
- ④ニジマスの第3脳室にある特殊な上皮組織（血管囊）を独自に開発した凍結割断技術を駆使して、走査電子顕微鏡下で三次元的に捉え、塩の調節機構を解明した。以後、なぜ心臓は休むことなく、ある一定のリズムをもって動き続けるのであろうかという謎解きを楽しんでいる。
- ⑤大分大学医学部教授



小金丸和義さん
(S50年卒・醸造生産学)

- ①清酒酵母の育種による新規清酒の開発
- ②博士（農学）
- ③鹿児島大学大学院連合農学研究科
- ④清酒の香りに関してフェニルエチルアルコール高生産酵母を、味に関してリンゴ酸高生産酵母の育種を行い、それらの生成機構を酵素活性と遺伝子発現の両面から解明した。
- ⑤佐賀県工業技術センター

学位論文名	取得学位
学位授与大学名	学位論文の概要
現勤務先	

支部 だより

佐賀大学同窓会大分県支部で総会開催



10月25日(土)大分第一ホテルに於いて「佐賀大学同窓会大分県支部」(別名:豊後はがくれの会)の平成20年度の総会並びに懇親会が開催されました。来賓として佐賀大学同窓会からも松尾農学部同窓会長をはじめ5名の出席をいただきました。総会の役員改選では、現行の役員体制、島田会長(農学42卒)、牧野事務局長(理工50卒)が承認されました。参加者は26名と昨年同様やや少ない状況でしたが、懐かしい人々との久しぶりの再会で楽しい時間を過ごすことが出来ました。

大分県支部の総会は、例年大分市内で秋に開催されており、これ以外に今年は春の時期に中津市で「梨の花見」、豊後大野市緒方町で「チューリップ祭り」、大分市での「ゴルフコンペ」など県内各地で多くの方々のお世話をいただきながら親睦の場を持つことが出来ました。なお、大分県における農学部同窓会は、現在105名であり総会の出席率も例年高く、上記のような活動の中心的な役割を担っています。特に、春の「梨の花見」においては高田先輩(S38年卒・園芸学 先の「ありあけ2号」に掲載)の絶大なる協力のもと恒例の行事となっています。同窓生の職場は、公務員、JA、醸造業関係、自営者等様々であり、なかなか会う機会も少ないため、身近なところから、誰でも気軽に参加出来るような取り組みを今後も企画していきたいと考えています。

事務局 清末 義信(S59年卒・果樹園芸学)

福岡県庁農政部佐和会の活動

農政部佐和会の前身である福岡県庁佐和会の発足の経過等については、私は全く不案内ですが、昭和40年代に佐賀大学出身の数名の先輩が発起人となり、福岡県庁に勤務していた各部の佐大出身者に働きか

けてスタートしています。

当初は、学部を越えた佐大出身の先輩県庁マンの集まりであり、さぞかし佐大での思い出や仕事面での先輩・後輩のディスカッションに華が咲いたものと推察されます。

その後、年を重ねるごとに福岡県庁に入庁される佐大出身者が多くなるに伴い、全体の把握が困難になり、佐和会の活動も下火になっていったと聞いております。

その様な状況のなか、農政部では農学科、園芸学科出身者の集まりがなされるようになり、現在「農政部佐和会」として活動を行っています。

平成20年度の現職会員が55名であり、本庁、農林事務所、農業試験場、防除所、農業大学校、農業改良普及センター等で活躍されています。近年は、農政部に採用される人が少なくなり寂しい思いをしておりましたが、20年度採用で山田恭子さんが7年ぶりに新人デビューとなりました。

活動としては、年1回ですが、7月頃に退職者の送別と新人の歓迎を兼ねて情報交換と懇親を盛大に行います。19年度は、大隈光善氏、古賀渡氏、小柳廣幸氏、仲 冽氏が勇退されました。

今後は、農学部同窓会との連携を図るとともに会員相互の親睦交流を深めていきたいと考えております。

会長 大石 一記(会長、S47年植物病理学)

佐賀県庁支部の総会開催

佐賀県庁支部では、9月5日、若楠会館において会員約40名が参加し、平成20年度の総会を開きました。平成19年度の事業実績や平成20年度の事業計画などを協議しました。その後役員の改選を行い前会長の内海先輩から福島が会長を引き継ぐことになりました。

また、農学部同窓会の松尾会長に御出席いただき、平成20年度事業計画として会報発行計画等農学部同窓会の最近の動きを中心に話題提供をしていただきました。

懇親会では久しぶりに顔を合わせる会員や、今年



度の新規会員5名(前年度は0名)を迎えて和気藹々の楽しい時間を過ごしました。

支部長 福島 末行 (S50年卒・果樹園芸学)

「農協連支部先輩を送る会」を開催

佐賀県では、平成19年4月に県内8JAが合併し「JAさが」としてスタートしました。さらに同年10月には佐賀県経済連の機能も包括承継し、県域JAとして事業が開始されました。

さて、佐賀県農協連支部では、去る6月2日に佐賀市の「はがくれ荘」において、平成20年6月末をもってJAさが役員を退任される2名の方の「農協連先輩を送る会」を開催しました。

今回はJAさがの専務として農協運動に貢献されてきました「中島進さん(S35年卒 農業経済)、松尾忠男さん(S35年卒 農業経済)」が退任されました。当日は農協連合同で開催し、うち農学会員約20名が農協職場での思い出話や苦労話などを伺いました。先輩方の今後ますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。

支部長 納富 敏明 (S56年卒・農芸化学)

燦々会(昭和33年入学生の会)同窓会開催

今回は入学以来50周年になり福岡県在住の世話人により平成20年10月15日~16日に歴史の街太宰府にて開催され盛況のうち終了しました。

入学した50年前の昭和33年は青春を謳歌しようとして心を躍らせ学舎に入ると同時に4月1日売春防止法が施行され全国の約12万人の売春婦が消え、10月には巨人軍の長島茂雄が新人王を獲得、12月1日には1万円札が発行され又12月23日には高さ333Mの東京タワーが完成した年でした。

同窓会は世話人代表古賀久男君の挨拶に始まり物故者への黙祷、乾杯、夫々の近況報告等があり時間の経つのも忘れ皆が学生時代に戻り佐賀大学学生歌「楠の葉の」を合唱し万歳三唱で閉会しました。

翌16日は太宰府天満宮へ参拝し「国宝天神さま」展が開催されている九州国立博物館に入館し蕙蓄を高め、帰りは太宰府天満宮宮司名代の古賀君の案内

で梅が枝餅の「重ね重ね餅」を小山田茶店で頂き、また筑豊の炭鉱主達が通ったお市茶屋や通い道のトンネルを見学し、3年後の佐賀での再会を約束して帰路につきました。

世話人は、代表の古賀久男、四丸勝利、熊谷情一郎、立川信之、原田重利、山田定信、山本久の各氏でした。



「73A農園会」同窓会を博多で開催

昭和48年(1973年)4月入学の農学科・園芸学科合同の第2回同窓会を、福岡県が幹事となり、10月4日に博多駅近くの居酒屋を貸し切って開催しました。

参加者は、19名(農学9名、園芸10名。一人記念写真に間に合わず。)で、遠くは千葉県から駆けつけてくれ、楽しいひと時を満喫しました。

今回は、2年後の2010年に熊本で開催することとなっています。

黒石 高秋 (S52・畜産学)



編集後記

・本号の表紙を飾った「パラフ」については、平成19年5月発行の「同窓会誌20号」に野瀬学部長が詳しく紹介されていますので、それと合せて読んでいただければ、幸いに思います。

・「会員の広場」では平山 伸さんが「佐賀大学への提言」と題して、これまでの国内外の大学へ行かれた経験をもとに、大変有意義な提言をされており、続編もご期待ください。

・「支部だより」では、従来の地域や職域等を対象とした同窓会支部が主体でしたが、今回は入学年度が一緒の同窓会から2件投稿がありました。このような同窓会の投稿も大歓迎です。その際は必ず同窓会の様子を撮った写真を1部添付してください。(K)